

Title	<紹介>後藤昭雄著 『本朝漢詩文資料論』
Author(s)	宮川, 真弥
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 146-147
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70916
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

後藤昭雄著『本朝漢詩文資料論』

宮川真弥

本学名誉教授後藤昭雄先生の手になる本書は、本誌前号に紹介する『平安朝漢文學史論考』（二〇一二年、勉誠出版）に次いで刊行された論文集であり、内容としては『平安朝漢文文献の研究』（一九九三年、吉川弘文館）に続くものである。

まずは、以下にその構成を示そう。なお、著者による各部の概要を（一）で示し、各節の題を（二）で示した。

- I（平安朝の主な詩文集の解題及びそれに準じるもの）
 - 1 『性霊集』について
 - 2 『菅家文章』散文篇の基礎的考察（一 本章の意図／二 散文篇の概略／三 各種文体について／四 問題点四条）
 - 3 『本朝文粹』解題（一 書名／二 編者／三 成立年時／四分 類・配列／五 作者／六 諸本）
 - 4 『本朝統文粹』解題（一 編者／二 成立年時／三 構成・巻数／四 編纂事情／五 作者／六 諸本）
 - 5 『朝野群載』文筆部考——文体論の視点から
 - 6 文は、願文・表・博士の申文
 - II（一書を成している作品を論じたもの）
 - 7 金剛寺蔵『文集抄』

8 『日本感霊録』の佚文をめぐって

9 三善清行『善家秘記』の newly 佚文（一『善家秘記』／二 金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉／三〈佚名諸菩薩感応抄〉所引の『善家秘記』佚文／四 賀陽良藤、靈狐と通接する話／五 十一面観音に祈念して「耶馬台詩」を読む話／六 老翁、山崎橋を架ける話／七 山崎架橋譚の流伝——『今昔物語集』／八 山崎架橋譚の流伝——『山崎架橋図』

10 金剛寺蔵『和漢朗詠集』（零冊）をめぐって

11 『花鳥集』

12 金剛寺蔵『花鳥集』翻刻

13 『全経大意』と藤原頼長の学問

III（佚詩の拾遺と、合わせて断片的に諸書に引用されている詩文の整理を試みたもの）

14 古代漢詩集成のこれまでとこれから——拾佚詩五首

15 古筆資料のなかの平安朝詩文（はじめに／一 本能寺切／二 伝藤原公任筆 詩書切／三 藤原行成筆 佚名本朝佳句切／四 唐尚歯会詩断簡）

16 平安朝詩拾佚——彰考館文庫蔵『詩集』から

17 早稲田大学図書館蔵『小野僧正祈雨之間賀雨贈答詩』をめぐって

18 『和漢兼作集』下巻の基礎的考察

IV (小論を別にしたもの)

19 『本朝書籍目録考証』補

20 国立歴史民俗博物館本『千載佳句』について

21 『本朝文粹』本文校訂三条

22 『愁鬢詞』本文校定——活字本の危うさ

あとがき

索引(人名索引／書篇名索引／事項索引(含詩題・文体))

各部の概要は()のごとく、著者あとがきに記されているが、なお第I部について附言すれば、そこには文体論が基調としてある。それは第I部のために、事項索引中に「**文体**」が別にたてられていることから窺える。

本書の魅力の一つは佚詩の拾遺や本文校訂などの基礎研究によって、見事に諸説を覆す点にある。一例を挙げよう。

「14 古代漢詩集成のこれまでとこれから——拾佚詩五首」では東寺観智院蔵『大師行化記』に見られる佚詩が取り上げられる。この佚詩には「三教指帰注未成」、その自注には「先師海和尚撰三教指帰、去元慶七年、然和尚請余作之注……」とある。かくして『三教指帰』が十世紀中葉に作られたものとする。『三教指帰』偽撰説に対して鮮やかに一石を投ずるのである。なお、元慶七年は西暦八八三年である。

また、本書に通底するのは学問の継承発展への希求であろう。新出資料を学界で共有しようとする姿勢は、新出資料のすべてに

翻刻を附した『平安朝漢文文献の研究』と同様であり、本書にも『花鳥集』『全経大意』の翻刻が載せられている。また、学説に対する尊重の姿勢もそれと同一線上にあるものであろう。第I部の解題での先行説の丁寧な整理はもちろん、とりわけ稿者の目を引いたのは、大学院の演習での院生の発言に教示を得たと氏名を挙げて注に記してある点であった。

さて、著者は現在、科学研究費助成事業「金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究―聖教の形成と伝播把握を基軸として」の代表者であり、河内長野市の天野山金剛寺での共同調査を毎月行っている。第II部においては、多く金剛寺蔵の新出資料が対象とされているが、この調査には本会関係者や本学大学院生も多く参加している。この調査には本会関係者や本学大学院生も多く参加している。稿者も末席に加わり、貴重な典籍を実見し、得難い経験をしている。その意味でも当該論考群は本会にとって非常にゆかりの深いものといえよう。

(勉誠出版、二〇二二年一月、四六六頁、九、八〇〇円)

(みやがわ・しんや 本学大学院博士後期課程・

日本学術振興会特別研究員)